

が多数あって、お金さえあれば（これがまた別な問題ですが）ほぼ日本と同様の治療ができるようになっていきます。ただ僕の勤務している病院は福建省でも車で1時間半ほど内陸に入ったところで、まだまだ医療が充実していません。僕はここで脊椎疾患の内視鏡を使った外科的治療ができるセンターを立ち上げようと思ってやってきました。医療圏としては600万人くらいで、日本で言えば千葉県くらいでしょうか、ここで脊椎内視鏡のできる医師はいないので、うまくいけばこの地域に十分貢献できると考えています。気候的には沖縄に似ていて、もうすぐ11月になろうとしています。まだ半袖で大丈夫です。雰囲気も僕が入学したころの沖縄に似ていて、病院の周りで農夫が水牛を散歩させています（今の西原ではそんなことはないと思いますが）。またここでは中国語（北京語）より「閩南話」という言葉が喋られていて、沖縄の方言に似た発音もあり親しみが持てます。

琉球大学の卒業生たちはすでに様々な所で活躍されていると思いますが、これからもどんどん活躍の場を広げてもらえたらと期待しています。福建省の福州は那覇市と、泉州は浦添市とそれぞれ姉妹都市にもなっています。これから卒業していく方たちでもし中国に興味があり挑戦してみようという方がいれば、何かアドバイスができるかもしれません。遠慮なくご連絡下さい。

(hkoga0808@gmail.com)

同窓会の更なる発展を期待しています。

<http://www.zxhospital.org/>

ベトナムと長崎と、そして沖縄と

山城 哲

(長崎大学熱帯医学研究所
アジア・アフリカ感染症研究施設
ベトナム拠点 教授)

長崎大学熱研に来て7年がたつ。熱研は文部科学省委託のJ-GRIDというプログラム校に選定されており、その関係で長崎とベトナムハノイとを行ったり来たりの生活である。

長崎と言えば、諏訪神社の奉納祭で、毎年10月初旬に催される、「長崎くんち」が有名である。長崎市に古くからある町を七組に分け、年ごとに奉納踊りを「踊り町（おどりちょう）」として披露する。今年の踊り町の一つに本石灰町（もとしっくいまち）が当番となったが、町の山車は「御朱印船」

で観光客の人気も高いものである。そこには男女2人の子供が乗船している。男の子は長崎商人の荒木宗太郎の役、そして女の子は、ベトナム人のお姫様とされるアニオー姫の役である。アニオー姫は16~17世紀、中部~南部ベトナムを支配していた玩（グエン）一族の当主の娘であるとされている。長崎県立博物館に所蔵される「金札和解」によると、当時荒木宗太郎は、東アジア交易ルート of 主要な港として栄えたベトナム中部のホイアンを拠点にし、王の信頼を得て、娘のアニオー姫を妻にめとったとされる。アニオー姫は御朱印船に乗って長崎入りしたとされ、婚儀の際には宝物が列をなし、お供の者が着た羽衣の様な衣装（アオザイ）は美しく、長崎の人々の心を奪ったとされる。またこの二人は住民に対して善行を行ったとされ、それを顕彰して本石灰町では長崎くんちで400年近く御朱印船の形をした山車を引き回すのである。このようにベトナムと長崎との間の人の交流は16~17世紀の東アジア大航海時代に遡る。

ところで、西太平洋の辺鄙な島嶼に過ぎず、人口も当時15~20万人程度であった琉球が王朝を成立させ、交易圏をマラッカ（マレー半島南部）まで確保できたのは東アジア史の奇跡であると言ってもよいであろう。歴史学者の高良倉吉氏（現沖縄県副知事）によると、琉球王朝（1429-1879）の成立と衰退にも、この東アジア交易ルートの中での、長崎を始めとする西九州地域が深く関与するとされている。当時、東アジア交易圏の最大のコンテンツは、「明」の文物であったらしい。処が、西九州およびその島嶼地域を始めとする初期倭寇の跋扈は苛烈なもので、明も自国民、財産保護のために国を閉ざさざるを得なかったのだそう（後期倭寇は他の東アジアの民が主流であったそうだが）。それにより、東アジア交易ルートでは明の文物の供給が途絶え、一種の渴望状態となった由である。当時琉球は細々と明と貿易を成し、島嶼で取れた硫黄、サンゴ、貝、馬（与那国馬か？）と引き換えに、大量の明の文物を公式に入手できたらしい。それをマラッカを含む南方に大量に売りさばいたのだ。つまり、琉球と明との交易ルートが、唯一の明の文物の東アジア交易圏への供給ルートとなったのである。これで大いに外貨を獲得した琉球はその資金を王朝設立の礎にしたのだという。このように、当時の東シナ海は貿易のコリドー（廊下）であり、我々が考えるほどに敷居は高いものではなかったのであろう。一つの国の